View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Prometheus-Academic Collections

2017 年度修士論文・修士研究題目

List of M.A. Theses/Projects 2017-2018

大学院総合国際学研究科　博士前期課程

氏　名	指導教員	論　文　題　目	備考
言語文化専攻　文学・文化学研究コース			
ボルジェルディーフ　ファテメ	柴田勝二	夏目漱石の初期作品における女性像分析―作者の鏡像に現れる「死」―	
地域国際専攻　地域研究コース			
ハン　スンヒ	米谷匡史	戦後日本人の朝鮮認識―日本朝鮮研究所の活動を中心に―	*
キム　インヘ	米谷匡史	金泰雲『朝鮮詩集』研究―李光洙の詩を中心に―	*
地域国際専攻　国際社会コース			
岩瀬　みゆき	米谷匡史	戦時期の野上弥生子―近代主義・女性・植民地―	*
地域国際専攻　国際日本コース			
嶋田　莉子	林　俊成	ストーリー付アニメーションを用いた漢字記憶識別の効果に関する研究―非漢字圏学習者に対して―	
ギ　ジョケイ	林　俊成	初中級中国語母語話者を対象とした海外日本語教育現場の反転授業の試み―福州大学の「総合日本語」科目を例として―	
白木　美依	谷口龍子	談話における語彙表現の選択と読み手の既有知識―日本語とドイツ語を例に―	*
ホ　ト	谷口龍子	中国日系企業における異文化間コンフリクトと解決方略―現地社員のライフストーリー・インタビュー調査を中心に―	*
マイオーネ　ブィンチェンツァ	谷口龍子	イタリア語母語話者向けの音声教材（試用版）の開発とその使用に関する実践報告―アクセント指導を中心に―	*
アハマド　カリーム エズエルディン	谷口龍子	アラビア語を母語とするエジプト人日本語学習者の発話における「のだ」の習得研究	*
土屋　雪子	阿部　新	マーシャルにおける日本語学習者のビリーフ―BALLI とメタファー分析を応用した言語学習ビリーフ調査から―	*
泉　大輔	鈴木智美	「感」の形式的特徴と意味・用法に関する包括的考察	*
キン　コウカ	鈴木智美	中国語を母語とする日本語学習者のオノマトペの習得状況―中国の大学における高学年学習者を対象に―	*
オウ　テンリン	鈴木智美	中国語を母語とする日本語学習者のプロソディ・シャドーイングがアクセントの産出改善に及ぼす効果	*
高田　麻由	宮城　徹	スリランカにおける日本語教師の教育観―中等教育機関の教師の語りからの考察―	

リ　チ　ン	宮　城　徹	外国人留学生の精神的健康に及ぼすアルバイト活動の影響—中華系私費留学生におけるアルバイト活動のインタビュー調査を中心に—	
村　川　永	中 井 陽 子	職場における異文化適応に影響を与える要因の分析—南米出身稼ぎ労働者と日本人上司へのインタビュー調査をもとに—	*
高　田　光　嗣	中 井 陽 子	レベル差のある日本語クラスにおけるピア・ラーニングの授業デザイン	*
小　美　濃　彰	友　常　勉	梶大介と梶満里子のバタヤ自立運動の研究—生活記録の読解と思想の考察—	
リョウ　ゲンバイセイ	友　常　勉	日本在住中国人女性の子育てに関する知識—国際結婚女性を中心にしたライフヒストリー分析から—	
田　村　映	藤 森 弘 子	ベトナム人日本語学習者と日本語母語話者による二者間会話の会話分析—参加の対等性の観点から—	
コ　ナ	藤 森 弘 子	中国語母語話者の日本語学習者における「きっと」と「必ず」の習得に関する一考察	*
ウ　セ　イ	藤 森 弘 子	日本語と中国語における「視点」を表す言語形成	
ラーソン　ベンジャミン　フィーリップ	藤 森 弘 子	タンデム学習に対するビリーフに関する一考察	*
キ　シ　ウ　ン	楠 本 徹 也	とりたて助詞に関する一考察—中国人日本語学習者の使用実態を通して—	*
キ　ョ　ウ　ウ　ン	楠 本 徹 也	呼称における日中対照及び待遇機能	*
コ　テ　ン　イ　チ	中　村　彰	複合辞の一語性について—生成文法のアプローチから—	*
サ　イ　ア　イ　レ　ン	早津美恵子	漫画作品における日本語オノマトペの形態上の特徴とその中国語訳について	*
デ　ナザレ　フィゲイラ　フ　ラ　ブ　ィ　オ	早津美恵子	日本語の「役割語」がブラジル・ポルトガル語にどのように翻訳されるか	*
チ　ン　レ　イ　テ　イ	柴 田 勝 二	漱石文学における家族関係	*
イ　ユ　フ　ァ　ン	柴 田 勝 二	大岡文学に表れる闘争と悲劇—その相対的存在を廻って—	*
リ　モ　ク　ゾ　ン	柴 田 勝 二	漱石前期作品における現実世界と「彼岸的世界」—『草枕』までの作品を中心に—	*
ラ　キ	柴 田 勝 二	三島文学における二重性と芸術性の関係—天皇観をめぐる—	
コ　ウ　ト　ウ　ト　ウ	柴 田 勝 二	村上春樹作品における動物の表象—鼠、羊と象を中心に—	*
アントネッラ　モルジ　ッ　ロ	柴 田 勝 二	戦後詩誌における「櫂」と詩人茨木のり子—戦争から造形された女性詩人—	*
チ　ョ　ウ　ヨ　ウ　コ	依集院郁子	日本人はどのようにユーモアを語るか—「わたしのちょっと面白い話コンテスト」をもとに—	*

サ　ハクヨウ	川　村　大	「させられる」述語文の意味と構文—人主語を中心に—	*
キュウ　ケンシュン	海 野 多 枝	第二言語不安から見た遠隔外国語教育—台湾の仮想教室型授業を対象に—	*
オウ　タンタン	藤 村 知 子	中日大学生による依頼メールの機能的要素の相違点—評価から見た丁寧さと要素の有無・提示順の関係について—	*
ソン　ルイ	村 尾 誠 一	平安朝における隠遁思想の受容と変容—都良香・紀長谷雄と橘在列を中心に—	*

*については、p. 148 以降に修士論文要旨を掲載

2017 年度修士論文・修士研究要旨

Abstracts of M.A. Theses/Projects 2017-2018

韓　昇憙（ハン　スンヒ）「戦後日本人の朝鮮認識―日本朝鮮研究所の活動を中心に―」

本論文では、戦後に日本人のみの民間研究団体として朝鮮に対する植民地支配責任を提起した日本朝鮮研究所（1961－84）の朝鮮認識の意義と限界を検討した。特に、60 年代に日朝友好運動のための実践的歴史学をめざした日本朝鮮研究所が、どのような過程を経て 70 年代に在日朝鮮人の権利獲得運動に邁進する運動団体となっていくのかについて考察した。日朝友好運動の理論化を研究活動の目標とした日本朝鮮研究所は、戦後日本で初めて北朝鮮の学者たちと学術交流を行う成果を出した。一方、日本朝鮮研究所は東アジア冷戦が激化するにつれて日朝友好運動の性格と役割をめぐって日本共産党と対立することもあった。共産党を支持した所員たちが研究所を離れた後、日本朝鮮研究所は所員の「差別発言」問題についての部落解放同盟の糾弾に対応するなかで在日朝鮮人差別の現実を直視し、日朝友好運動から在日朝鮮人の権利獲得運動へ活動の重点を移し、研究団体から生活密着型の運動団体に変貌していく。

金　忍惠（キム　インヘ）「金素雲『朝鮮詩集』研究―李光洙の詩を中心に―」

本研究は日本植民地期という特殊な時代に生きていた金素雲の生涯と作品を通して当時の朝鮮人文学者が抱えていた歴史的状況を調べるとともに、韓国で代表的な親日文学者として知られる一方、詩人としては比較的評価されていない李光洙の詩が金素雲が翻訳した『朝鮮詩集』に収録されている意味を探った。そして、金素雲訳の李光洙詩とその原詩、金時鐘の『再訳朝鮮詩集』を対照する作業を行い、金素雲の翻訳技法とその差異について考察した。

『朝鮮詩集』は金素雲も認めたように、単純に他の詩人の詩を翻訳した「翻訳詩集」ではなく、金自身が創作した「金素雲詩集」というべきものであることが分かった。日本では「名訳」として認められている反面、韓国ではその詩集が発刊された「植民地時代」という特殊な時代背景により、それほど評価されていない傾向があった。しかし、これはおそらく「時代背景」の問題だけではなく、金素雲の翻訳があまりにも「日本風」であることも一つの要因になったと考えられる。

岩瀬　みゆき（イワセ　ミユキ）「戦時期の野上弥生子―近代主義・女性・植民地―」

本稿は、1930 年代半ばから 1950 年代前半までの野上弥生子のテクストを近代主義、ジェンダー、植民地主義の観点から解釈しなおし、戦時期と戦後における作家の精神の連続性を明らかにすることを目的とする。序章では問いの設定、先行研究、分析対象と構成を提示した。第 1 章では戦時期の言説と作家活動を検討した。第 2 章は女性をめぐる言説に焦点を当てた。第 3 章では、植民地旅行記を分析し、野上の意識に内在化された植民地主

義を明らかにした。終章では戦後に発表された連作小説について論じつつ、全体の議論を総括した。野上の基本的な関心は、日本社会が封建性から脱却し、欧米に倣って合理性と科学性に基づく近代社会が形成されることにあった。そうした観点から、戦時期には戦時体制への女性の参与が説かれ、戦後には社会の民主化が論じられた。野上の近代主義的な発想は、近代化の使命の肯定につながり、内面化された植民地主義は戦後に継承された。

白木　美依（シロキ　ミエ）「談話における語彙表現の選択と読み手の既有知識―日本語とドイツ語を例に―」

本論文では、日本語とドイツ語の書き言葉の談話における語彙表現の選択について、語彙カテゴリーレベルの観点から分析した。分析にあたっては、想定される読み手層の既有知識量の多寡と、書き手が選ぶ語彙表現の傾向の対応に注目した。データは、ウェブ上で公開されている、特定の商品の紹介記事を用い、語レベルと意味レベル（句・文・談話のレベル）で整理した。日本語とドイツ語の比較対照からは、個別言語に特有の語彙表現傾向のパターンがあるかどうかを探った。調査の結果、日本語では、文章のメイントピックと上下関係にある語彙より部分全体関係にある語彙のほうが、読者層に応じた語彙表現の異なりが見られた。一方、ドイツ語ではその傾向があまり見られなかった。また、日本語では、読者層に応じた語彙の使い分けがない場合に、7 種類の方法で情報の補足が行われていたが、ドイツ語で見られた方法は 3 種類であった。

保　彤（ホ　ト）「中国日系企業における異文化間コンフリクトと解決方略―現地社員のライフストーリーインタビュー調査を中心に―」

本研究では、中国における日系企業で勤める中国人社員に対するライフストーリーインタビューにより、在中日系企業における異文化間コンフリクトの種類、生じる場面および対応行動を分析した。その結果、親日的であるとされている大連日系企業においても中国人社員と日本人社員のビジネスコミュニケーションには常にコンフリクトが生じ、「日本人社員から指示を受ける場面」「日本人社員に報告する場面」「日本人社員に提案する場面」などの八つの場面に、「言語問題」「日本人社員との人間関係」「中国社会と日本社会の相違」などの八つの種類の問題に関してコンフリクトが生じていることが分かった。中国人社員は以上のコンフリクトが生じた際、「回避」が最も使われ、「協調」が 2 番目に多く使われていることも明らかになった。この調査結果により、本研究は言語と非言語の二つの面から解決方略を提案し、ビジネス日本語教育への示唆を示した。

マイオーネ　ヴィンチェンツァ「イタリア語母語話者向けの音声教材（試用版）の開発とその使用に関する実践報告―アクセント指導を中心に―」

イタリアの日本語教育では音声教育が重視されていない傾向がある。そこで本研究ではイタリア人向けに日本語のアクセント指導用の遠隔教材を開発、来日経験のないイタリア

人日本語学習者（16 名)に使用してもらい、一連の実践について報告した。教材使用前、使用直後と一か月後のテストの結果を見るとアクセントの向上に一定の効果が見られたことがわかった。さらに、イタリア人学習者に正しい音声で発話をすることを意識させ、音声教育の重要性を認識させることにも成功したと言える。

アハマド　カリーム「アラビア語を母語とするエジプト人日本語学習者の発話における「のだ」の習得研究」

本稿はアラビア語を母語とするエジプト人日本語学習者を対象にし、「のだ」の習得状況を考察することを目的にしている。「のだ」という文末表現は日本語教育では初級レベルの段階で教える項目であるが使用頻度が少ないという現状がある。本研究では、エジプト人日本語学習者の「のだ」の習得状況を包括的に考察するために、学習者の「のだ」に対する知識、学習者の使用状況、学習者の使用意識という三つのアプローチからそれぞれ談話完成タスク、自由会話、アンケート調査の方法により分析を行った。考察を通して、エジプト人日本語学習者は「のだ」の使用を重視しておらず、「のだ」を使用せずにその他の表現やストラテジーを使用しつつ、コミュニケーションを取っていることが判明した。

土屋　雪子（ツチヤ　ユキコ）「マーシャルにおける日本語学習者のビリーフ—BALLI とメタファー分析を応用した言語学習ビリーフ調査から—」

本論文では，マーシャル諸島共和国（マーシャル）における日本語学習者のビリーフを明らかにすること，日本語学習者のビリーフが，国の特性にどのように結びついているのかを明らかにすること，日本語教育の発展の可能性について指摘し，現状における課題点に対して提言することの 3 点を目的とし，現地で BALLI とメタファーを用いてビリーフ調査を行った。BALLI 調査の結果，日本語学習者の一般的なビリーフは，自信と誇り，強い内発的動機づけがあること，またメタファー調査の結果，難しい，楽しい，不確実コントロール，内発的動機づけ，正の感情エンゲージメントといった概念が明らかになった。以上から，より個々に対応できる学習環境づくり，学習者が達成感や満足度を得られるような活動を行うこと，マーシャルの学習者に合った音声教材の開発，文字教育の指針作り，学習者の自己形成に寄与できるような日本語教育を考えることの必要性が明らかになった。

泉　大輔（イズミ　ダイスケ）「『感』の形式的特徴と意味・用法に関する包括的考察」

本研究では、現代日本語における「感」という形式を取り上げ、コーパスなどの実例に基づき、その形式的な特徴を明らかにした上で、形式と意味との対応関係を明らかにすることを目的としている。形式的特徴に関して、何も前接しない「感」は共起する述語に制約があること、「感」が合成語の後部要素としてふるまう場合は従来的な漢語語基以外にも多様な要素が前接すること、モダリティ形式を含む文などが「という」を介さずに「感」に直接前接することなどが明らかになった。また、先行研究の意味記述によると、「感」に

は①「強く深い心の動き」と②「物事に接したときに生じる心の動き」という大きく 2 つの意味があると考えられ、後者はさらに「気持ち」あるいは「感じ」に言い換えられる場合がある。この他に、③「感覚的な尺度に基づいて測った程度」という意味を表す実例があることを指摘し、上記の 3 つの意味とそれぞれ対応する形式について記述している。

金　香花（キン　コウカ）「中国語を母語とする日本語学習者のオノマトペの習得状況―中国の大学における高学年学習者を対象に―」

本研究の目的は、中国語を母語とする日本語学習者がオノマトペを理解する際に、何を手掛かりとして、どのように理解しているのかを明らかにすることである。

先行研究を検討した結果、オノマトペの難しさを指摘している研究や、学習者のために基本オノマトペの選定を試みている研究などは多く行われているが、学習者が何を手がかりとして、どのようにオノマトペを理解しているのかに関する研究は、管見の限り見当たらなかった。

そこで本研究では、中国の大学における中国語を母語とする高学年日本語学習者を対象に、アンケート調査とインタビュー調査を通じて、その具体的な理解プロセスを調べた。

その結果、学習者は主にオノマトペに含まれるある音から、音の似ている中国語の象声詞を手掛かりにしたり、ある音から別の日本語の語や中国語の語を連想したり、音に対して抱くイメージから、対象物や対象物の状態などを連想して意味を推測していることが分かった。

王　添霖（オウ　テンリン）「中国語を母語とする日本語学習者のプロソディ・シャドーイングがアクセントの産出改善に及ぼす効果」

本研究の目的は、プロソディ・シャドーイング練習が中国語を母語とする日本語学習者のアクセント改善にもたらす効果を検証することである。

先行研究では、シャドーイング練習が日本語の学習者のアクセントの改善に対する効果があると論じてきたが、ほとんどの研究のシャドーイング練習の実施時間が 1 学期間から 1 年間までとなり、シャドーイング練習がアクセントの改善の主な原因だと考え難いと思われる。また短期的（10 日間）な研究では、毎日の練習内容とテスト材料の内容が同一であることが見られ、他の文脈においても、改善が見られるかどうかは考えにくいと思われるため、本研究ではシャドーイングの練習用材料とテスト用材料をそれぞれ作り、10 名の中国語日本語学習者を対象に、5 日間のシャドーイング練習を実施した。結果、プロソディ・シャドーイング練習はある程度の聞き取り能力のある学習者にとってアクセントの改善効果があるとわかった。

村川　永（ムラカワ　ハルカ）「職場における異文化適応に影響を与える要因の分析―南米出身稼ぎ労働者と日本人上司へのインタビュー調査をもとに―」

本研究は、日本語能力の高くない南米出身出稼ぎ労働者が職場においてどのように異文化に適応しているのか、また、適応に影響を与える要因は何かを主にインタビュー調査によって明らかにし、質的に分析することを目的とする。調査協力者は南米出身出稼ぎ労働者 2 名とそれぞれの日本人上司である。分析の結果、彼らの真面目に仕事に取り組む姿勢、ホスト側である日本人の外国人に対する態度などが南米出身出稼ぎ労働者の適応に影響を与えていること、日本人も外国人と接することを通して異文化に適応するようになり、それが外国人側の適応を促進していることが明らかになった。また、母文化で築いてきたアイデンティティと異文化環境下での自分自身のあり方との乖離は適応の阻害要因になるものの、異文化環境に留まる必要性がある場合、南米出身出稼ぎ労働者は何とか日本に適応する方法を模索するということも判明した。

高田　光嗣（タカダ　コウジ）「レベル差のある日本語クラスにおけるピア・ラーニングの授業デザイン」

本研究では、日本語能力のレベル差のあるクラスにおいて、ピア・ラーニングのジグソー法を応用した授業をデザイン・実践し、そこから得られたデータの分析によって、ピア・ラーニングがレベル差に起因する諸問題の解消に有効であることの実証を試みた。日本語学校の中級後半クラスの学生 13 人を対象にピア・ラーニングを実施し、2 つのグループから得られた会話データ、授業後アンケート、フォローアップ・インタビューの内容を分析した。分析の結果、1 つのグループではグループ内の全ての学生が積極的に発話し、協働が促進されていた。しかし、もう一方のグループでは協働がうまく促進されなかったという結果が得られた。その要因を考察すると、協働が促進されるためには、レベル差に配慮した活動を設定するだけでなく、「他者への発話の促し方」「進行調整の方法」「教師の介入」という 3 つの点から適切に授業をデザインする必要があるということが分かった。

胡　娜（コ　ナ）「中国語母語話者の日本語学習者における「きっと」と「必ず」の習得に関する一考察」

本稿では、調査紙調査によって、中国語母語話者の日本語学習者における「きっと」「必ず」の習得実態を考察し、中間言語の発達という視点から、日本語母語話者と比較しながら、「きっと」「必ず」の使用傾向を、習熟度別、学習環境別に分析してきた。調査の結果、日本語学習者の産出を分析したところ、日本語学習者は「きっと」「必ず」の使い分けにおいては、特に文末の共起制限がある用法で日本語母語話者と異なる産出傾向が観察された。また、学習者の習得に影響を及ぼす要因を分析したところ、中国語「一定」からの影響、また学習環境および日本語習熟度からの影響が見られた。さらに、調査は短文作成問題と

選択式問題という２種類のタスクを実施したが、タスク形式の違いによって正誤率のずれが現れている。最後に、結果や考察から考えられる日本語教育への示唆にも言及した。

ラーソン　ベンジャミン　フィリップ「タンデム学習に対するビリーフに関する一考察」

本研究ではタンデム学習に対するビリーフを把握するためのアンケート調査を作成し、実施した。 調査の対象は東京外国語大学で LETS という学生団体によって行われているタンデム学習の参加者である。この調査は全３回、２学期にかけて行い、そして延べ 178 の回答を得た。LETS の参加者は通常 TUFS で日本語を学習している外国人学生（JL）と TUFS で外国語を専攻している日本人学生（JS）である。

JL と JS の回答者は両方ンデム学習でスピーキング・リスニングというスキルを上達させられるという期待を抱いた参加者は多く、ライティング・リーディングというスキルを上達させられる期待を抱いた参加者達は少なかった。互いの学習を支援する志向も、そして自律的な態度も示した。少数の回答者は教室外での学習の有効性に対して疑問を表した。

タンデム学習に関するビリーフの項目に加えて、筆者は自己能力評価とタンデム学習での学習目的の項目も調査票に入れた。自己能力評価と学習目的を比べると、関連性が殆ど見られなかった。一方で、タンデム学習に対する期待とタンデム学習での学習目的の関連性が強かった。

姫　子云（キ　シウン）「とりたて助詞に関する一考察―中国人日本語学習者の使用実態を通して―」

本研究では、日本語におけるとりたて助詞「だけ、ばかり、しか、も、まで、さえ、でも、くらい、など、こそ、は」を研究対象とし、中国人日本語学習者がこれらのとりたて助詞をどの程度に習得しているかをアンケートで調査した。アンケートは中国国内の中国人学生 85 人に実施し、彼らが日本語のとりたて助詞の使用においてどのように間違えやすいかを調べ、その原因を分析した。また、中国での日本語教科書におけるとりたて助詞の扱われ方を検証し、誤用との関連を考察した。調査の結果、和らげのモ、極限のデモ、ダケナラ／ダケデモ、格助詞との接続（例：買い物ニデモ）において正答率が低かった。これらは中国語との構造的・意味的違い、日本語学習での未習などが原因と考えられる。それゆえに、中国人日本語学習者に中国語と日本語の差異を認識させ、どのようにして中国人日本語学習者に対する日本語教育に導入させていけばいいかを考えていくことが肝要である。

喬　雲（キョウ　ウン）「呼称における日中対照及び待遇機能」

本研究では、中国人日本語学習者（以下「学習者」）を対象とし、日本人との接触場面において呼称に関してどのような誤用が現れるのか、そしてその誤用は母語とどのような関

わりがあるのかを分析し考察する。研究方法は、日本語における呼称の使われ方について学習者が正しく知っているか調べるため、38 名の中国人対象者にアンケート調査を行った。

アンケート調査を分析した結果、被験者の日本語呼称の使用について正用率は高い、あるいは、彼らの日本語呼称の使用傾向が日本人母語話者に近いことが分かった。そして日本語の学習年数が多くなるにつれて、正用率も高くなる。しかし、37%の被験者が日本人母語話者に呼ばれた時に違和感を覚えた、あるいは失礼な感じがしたことがあると答えている。そして 61%の被験者が日本語の呼称の使い方について困ることがあると答えている。その原因について分析する。

顧　天一（コ　テンイチ）「複合辞の一語性について―生成文法のアプローチから―」

（1）の下線部の「に従って」は、従来の日本語研究では複合接続助詞として分析されることが多い。

(1) 時代が発展するに従って、生活が豊かになった。

しかし、複合接続助詞として分析すると、2 つの欠点が出てしまう。(2) と (3) に示しているように、まず、「『に従って』構文ではガノ交替が起こり得る」、それから、「『に従って』の直前に『の』が入る」、この 2 つの事実については説明できない。

(2) 時代（が・の）発展するに従って、生活が豊かになった。

(3) 時代が発展するのに従って、生活が豊かになった。

一方、筆者の提案する空代名詞「φ」によって、「に従って」をめぐる文法現象をうまく説明できるようになる。

(4) 時代が発展するφに従って、生活が豊かになった。

「に従って」の直前に空代名詞を設ければ、なぜ「発展する」が連体形で来ているかはもちろん、空代名詞によって連体修飾を成すため、ガノ交替も説明できるようになる。

蔡　愛蓮（サイ　アイレン）「漫画作品における日本語オノマトペの形態上の特徴とその中国語訳について」

日本語非母語話者が日本の漫画ストーリーを翻訳する際に、様々な障害にぶつかるが、その中でも一番問題となっているのは絵と台詞とは別に漫画背景に現れる擬音語や擬態語などのオノマトペをいかに理解することである。本研究は品詞分類や句構造などの中国語文法を取り入れ、統語的機能の着眼点を用い、擬音語と擬態語の中国語訳手法を分析し、拘束型形態素、一単語、句、文の四つの言語単位での対応が可能だと解明した。品詞性の観点から、中国語オノマトペに当たる「象声詞」での対応以外に、様態副詞の役割を担うオノマトペをその語が修飾する動詞や動詞句、副詞の修飾受ける形容詞や形容詞句に翻訳することができる。擬態語は単語以外に、句での対応が多く、様々な句構造のうち、動作や状態とそれらがどのように行われているかの両方を描写できる述語補語構造及び偏正構造の動詞句・形容詞句は原文擬態語の持つ意味性質を一番再現できると主張する。

デ　ナザレ　フィゲイラ　フラブィオ「日本語の「役割語」がブラジル・ポルトガル語にどのように翻訳されるか」

本研究はブラジル・ポルトガル語へ直接に翻訳された日本の人気少年漫画の作品を分析データとし、日本語の「役割語」がブラジル・ポルトガル語への翻訳に対応されているかどうかを考察し、更に、その対応が具体的にどのような手法のもとで行われているかを分析した。

「役割語」の分析を行うために、原作に見られる全キャラクターのセリフ及び原作のセリフに相当する翻訳作品のセリフが収集され、データベースが作られた。データの考察から、対応されていると見られた「役割語」の種類は「田舎ことば」、「異人ことば」、「男ことば」、「女ことば（おネエことば）」であり、日本語の「役割語」がブラジル・ポルトガル語の翻訳に様々な語彙的や文法的な特徴などによって対応されていることが明らかにされた。

今後の課題として、ブラジル・ポルトガル語への翻訳に見られる「役割語」の対応の様相をより体系的に考察するために、更に幅広いジャンルの作品を対象とする調査が必要とされる。

陳　麗婷（チン　レイテイ）「漱石文学における家族関係」

周知のように、漱石は両親に縁の薄かった作家である。しかし、その作品に現れる家族に対する関心が同時代の作家と比べると圧倒的に高い。その里子時代の家庭生活に対する実体験が『道草』に描かれており、ほかの作品にも、登場する主人公たちと家族との関係は、作品の主題と深く関連し、大きく機能している。したがって、漱石の作品における家族関係を探求することは、漱石文学を正確に理解する上での重要な鍵であると考えられる。漱石が作品に取り扱ったのは、日本の近代化の中で「家族」が変わっている時代である。本論は漱石の作品に描かれる家族関係を親子関係、兄弟関係、夫婦関係に分け、漱石の＜家＞の実体験を繋ぎながら、当時の家制度を踏み、漱石の＜家＞に対する認識、その描かれた家族関係に表現したいものを探求した。

李　侑桓（イ　ユファン）「大岡文学に表れる闘争と悲劇―その相対的存在を廻って―」

本論文では、戦後派作家大岡昇平の作品の中で表れる日常と非日常の側面においての分析を通して、作者と作中の人物が持つ特性と思想について一つの解釈を引き出すことを目標にしている。これまでの戦後小説に対する分析から離れて、大岡が持つ特性を既存の日本文学における私小説的特徴とフランスの心理主義文学的叙述法から受け継がれたものであるとし、特に注目する部分として作中で描かれた舞台の反転と思想的対立から起因する作家の一貫した主題を調べ、そこから表れる文学的思想と作者の根本的姿勢に対する考察を行う。本稿では戦争を描いた作品と日常における人間の心理とその推移を描いた作品についての分析を進め、同時にその文学観形成に多大な影響を与えたフランスの作家スタン

ダールとの関連性を論じ、作家の独特な文体と執拗に明晰を追求する叙述法から読み取れる明瞭さとあいまいさ、日常性と非日常性の関係に対する定義を行うことにしている。

李　黙存（リ　モクゾン）「漱石前期作品における現実世界と「彼岸的世界」—『草枕』までの作品を中心に—」

漱石の前期創作には現実世界を捉え、現実と向き合おうとする志向を表す作品と、現実世界の反対側にある幻想的で生き得ないゆえの「彼岸的世界」を描く作品という二つの傾向のせめぎ合いが見られる。留学以前の創作に描かれる「仙郷」は「彼岸的世界」の表現である。しかし単なる現実世界からの脱却と「我」という自己意識から解放する脱俗への憧れではなく、現実的認識の一面も表している。留学を境に漱石の現実志向が強まる。現実世界を捉える「写生」は、「我」の意識を中心とする特徴の背後に『文学論』との繋がりがある。諧謔的な写生文は人物を国家の寓意を担わせて登場する現実志向が強い一方、脱俗的傾向も見られる。ほぼ同期の『草枕』の「非人情」は「我」からの解放であり、脱俗的な「彼岸的世界」を描く作品であるが、最後に連載終了後の現実志向を表す書簡と同じ傾向が見られ、『草枕』は「彼岸的世界」を描く最後の作品になる。

黄　棠棠（コウ　トウトウ）「村上春樹作品における動物の表象—鼠、羊と象を中心に—」

本論は三章に分けて村上春樹作品における「鼠」、「羊」と「象」の表象を考察した。

第一章では、「鼠」の名前を持たないことから始まり、動物としての「鼠」の名前の由来を日本古典文学の説話を考察した。そして村上春樹の鼠三部作を取り上げ、大江健三郎の『万延元年のフットボール』と比較し、「鼠」は「僕」の 60 年代への情念の担い手であると論じてみた。

第二章は「羊」に関する先行論分析し、その宗教性と時代性に注目した。最後は『羊をめぐる冒険』と『ダンス・ダンス・ダンス』を取り上げ、「羊」が情報のメタファーであると考察した。

第三章では、「象」の「思想」、「国家の論理」と「情報」である表象の分析で始まる。その後は『踊る小人』、『象の消滅』と『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』に着目し、情報社会に置かれる個人の「自我」の生き方を主題として論述してみた。

アントネッラ　モルジッロ「戦後詩誌における「櫂」と詩人茨木のり子—戦争から造形された女性詩人—」

日本の詩は二十世紀にわたって大きく変わってきた。特に、第二次世界大戦後に書かれた詩が特別な形をとっており、当時の出来事の反映として見なすことができる。戦争の敗北によってその世代の詩人たちの間に異なっている反応があった。人間に対して反発的な気持ちを覚え始めた詩人とともに、詩を通して戦争の酷さを乗り越えられることを信じていた詩人もいた。戦後詩壇の特徴の中で詩誌の創刊はその一つである。日本では戦後中に

もっとも評判になった詩誌は「荒地」、「列島」、「櫂」である。本論文では「櫂」という詩誌の発展と特徴に注目されながら、戦後における詩人茨木のり子の活動と詩作が紹介されている。特に、『櫂』詩誌と茨木のり子の関わりに目を向けながら、戦争の体験はどういう風に茨木のり子の詩作法に影響を与えたのかということが勉強されている。

張　洋子（チョウ　ヨウコ）「日本人はどのようにユーモアを語るか―『わたしのちょっと面白い話コンテスト』をもとに―」

文化に関わらず、人が気持ちよく交流する際に使われる手段の 1 つとしてユーモアが挙げられる。本研究は、異種の組み合せによる不適合が笑いを生起させると指摘している「不適合理論」を取り上げながら、「わたしのちょっと面白い話コンテスト」の中から抽出した日本人による 220 作品を分析データとし、話の「対象」、「形式」、「構造」及び「言語的特徴」について分析を行った。

その結果、「対象」において、他人を笑う話がもっとも多く、「形式」において、96.82%が個人の経験談などが見られる「ナラティブ」の形式となっていることが分かった。また、「ナラティブ形式」の作品の構造を分析した結果、パンチラインで話を終わらせる作品が非常に少なく、その代わりに、パンチラインが終わった後でも情報を続けて提供している作品が多いことが分かった。最後に、不適合を予告する重要な役割を果たす「たら」と、聞き手に未知の情報を認識させようという話し手の心的態度を反映した「のだ」が、日本語母語話者がユーモアを語る際に目立つ言語的特徴であることが明らかになった。

左　白楊（サ　ハクヨウ）「『させられる』述語文の意味と構文―人主語を中心に―」

従来、「させられる」述語文の使役受動文を中心として主に被役と誘発という 2 つの意味があると指摘されてきた。しかしながら、「させられる」述語文のほかのタイプの文の意味及び構文特徴については、ほとんど明らかにされていない。

本研究は BCCWJ から抽出したデータのうち、人主語の「させられる」述語文を対象とする。「させられる」形を「させる」と「られる」が組み合わされたものだと考え、「させられる」述語文タイプの異なる意味、異なる構文を分析した。

具体的には、「させられる」述語文を大きく使役受身、使役可能、尊敬に分類した。この 3 つの大きなタイプを 3 大分類と呼んでいる。さらに、下位の分類として、使役受身を強制の受身 、許可・放任の受身及び原因の受身に、使役可能に強制の可能、許可・放任の可能、放置の可能に、尊敬に強制の尊敬及び二重尊敬に細分類し、全部で 8 つの細かいサブタイプを立てた。

邱　顯峻（キュウ　ケンシュン）「第二言語不安から見た遠隔外国語教育—台湾の仮想教室型授業を対象に—」

学習者にとって、オンラインと教室という 2 つの授業環境において不安の度合いは異なるか—これが、本研究の最大の焦点である。したがって、本稿の目的は、教育環境の違いを不安の側面から捉え、教室と遠隔教育における不安の実態を明らかにすることにある。

本稿では、台湾の遠隔外国語教育を経験する学習者と教師 109 名を対象に、不安の実態を実証的に分析した。結果、学習者の不安は教室および遠隔という 2 つの教育環境によって異なり、遠隔教育環境には教室より低いレベルの不安を感じると考察できた。さらに、その要因に「他者との関連」というキーワードが 1 つ決定的な要素であると論じられた。

これまでは、遠隔教育はその利便性に注目が集まっており、習得に関する討論はほとんど見られない。本稿では、不安の観点から遠隔教育における第二言語の習得にかかわる利点を論じた。これは、学習者が教育環境を選択する際に考慮すべき 1 つ有益な情報となりうると考えられる。そしてまた、本研究の意義でもある。

汪　丹丹（オウ　タンタン）「中日大学生による依頼メールの機能的要素の相違点—評価からみた丁寧さと、要素の有無・提示順の関係について—」

本研究は、面識がない目上の相手にメールで依頼を行うことを取り上げ、中国人日本語学習者と日本語母語話者各々が書いたメールの文章を「機能的要素」という観点から分析することにより、それがメールの丁寧さやメールの文章構造にどのように影響するのか、また、中国人日本語学習者と日本語母語話者による違いを明らかにし、日本語教育における依頼メールの書き方指導の際の注意点を導いた。これまであまり取り上げられてこなかった「恐縮表明」と「自己紹介」、「依頼予告」という「機能的要素」に注目し、調査結果を分析したところ、中日協力者の使用意識については、共に「『恐縮表明』から『自己紹介』のほうが丁寧」という回答が最も多かったが、使用実態には相違が見られた。また、「依頼予告」についても書いた方がいいとの回答が多かった反面、実際に書いた人数は少なく、これらの点をメールの書き方指導の際の注意点として導くことができた。

孫　蕊（ソン　ルイ）「平安朝における隠遁思想の受容と変容—都良香・紀長谷雄と橘在列を中心に—」

本稿では、都良香・紀長谷雄・橘在列という平安初期から平安中期まで三人の官僚文人の詩文を、時代背景をあわせて考察し、彼らの隠逸志向に関するいくつかの問題を検討した。日本の隠逸思想は中国から受容した後、日本の特有な風土と当時代特定の政治背景とを融合し、その自国性と特定政治性が反映されていると思われる。本論は、序章では、中国隠逸思想の歴史的な流れおよび平安朝における中国隠逸思想の受容について概説した。第一章では、良香の神仙・隠逸思想に注目し、彼の詩文が中国の「山水記」・「名山記」さらに老荘思想との関連性を考察し検討したのである。第二章では、長谷雄が生きていた時

代の政治状況を合わせて、詩人と官吏としての長谷雄における身分的な二重構造からその隠逸志向に対する心の葛藤を分析してみた。第三章では、橘在列の境遇と当時摂関政治という社会状況を考察しつつ、『扶桑集』における橘在列・源英明の一連の唱和詩を中心にして、その詩境に現れた隠逸志向が如何なるものかを明らかにしようとした。終章では検討してきたところを纏めたうえで、平安朝隠逸思想における後世への影響と、今後の課題についても展望してみたのである。